

『待賢門院堀河集』注釈（四）

加藤 睦

松本 真奈美

○本稿は宮内庁書陵部蔵『待賢門院堀河集』（五〇一・五七）を底本とし、その六五番歌から八四番歌までの本文を掲げ、注釈を施したものである。凡例については、『立教大学 日本文学』第一〇一号所載の『待賢門院堀河集』注釈（一）を参照されたい。

○本注釈における和歌の引用は、特に断らない限り『新編国歌大観』に、散文の引用は『新編日本古典文学全集』によった。ただし『今鏡』の引用は『新訂増補国史大系』に、『梁塵秘抄』の引用は『日本古典文学大系』による。いずれの場合も引用に際して適宜表記を改めた。

六五 竜田姫^{たつたひめ}もろこしまでも通^{かよ}へばや秋の木ずゑの唐錦^{からにしき}なる

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】

紅葉を染める竜田姫が唐土までも行き来するから、秋の梢の紅葉は唐錦なのだろうか。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・秋・一〇五一

たつた姫もろこしまでもかよへばや秋の木ずゑのから錦なる
○『後葉集』秋下・一七一

百首歌めしけるに 待賢門院堀川

立田姫もろこしまでもかよへばや秋のこずゑのからにしきなる
○『中古六歌仙』堀河局・二四五

紅葉

たつたひめもろこしまでもかよへばやあきのこずゑのからにしきなる

【語釈】○竜田姫 竜田山は平城京の西にある。陰陽五行説では西は秋の方位に相当するため、竜田姫は秋の女神とされた。木の葉を染めて紅葉させる神と考えられていた。「見るごとに秋にもなるかな竜田姫もみちそむとや山もきるらん」（後撰集・秋下・三七八・読人不知）。○もろこしまでも 唐土までも。同じ句を用い、唐土まで行く秋の心を詠じた先行歌に「はるかなるもろこしまでも行くものは秋の寝覚めの心なりけり」（大弐三位集・四三／千載集・秋下・三〇二）があり、参考になる。同時代の西行にも「我ばかり物思ふ人やまたもあるともろこしまでも尋ねて

しがな」(山家集・一三〇二)の用例がある。○唐錦 外国渡来の、さまざまな色の糸を用いて織りあげた華麗な織物。「綱代木にかけつつ洗ふ唐錦目をへてよする紅葉なりけり」(拾遺集・冬・二一六・読人不知)など、紅葉の美しさをこれに見立てることが多い。当該歌ではさらに、唐土の意の「唐」を掛ける。

【補説】秋の紅葉を唐錦に見立てた上で、日本の女神である竜田姫がこのような唐錦を織ることができるのは、立田姫が唐土までも行き来するからなのだろうかと思つた一首。五四、五五番歌と同様にことば遊び的な歌である。

冬

六六 はれくもり時雨の空をながめてもさだめなき世ぞ思ひ知らるる、

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】冬

晴れたり曇ったりする時雨の空を眺めるにつけても、無常の世が思ひ知られることよ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・冬・一〇五五

晴れくもる時雨の空をながめてもさだめなき世ぞ思ひしらるる

【語釈】○はれくもり 晴れたり曇ったり。「はれくもりさだめなければ初時雨妹が袖笠かりて来にけり」(堀河百首・時雨・九〇七・藤原基俊)。○時雨 晩秋から初冬にかけ、降ったりやんだりする雨。

その「さだめなき」様は、前掲の基俊詠以前にも「神無月降りみ降らずみさだめなき時雨ぞ冬の始めなりける」(後撰集・冬・四四五・読人不知)と歌われている。参考↓四三番歌。○さだめなき世 無常の世。

【補説】降ったかと思うとすぐ降りやみ、やんだかと思うとまた降り始める「さだめなき」時雨を眺めつつ、世の無常を観じた一首。表現面では前掲の基俊詠に依拠しつつも、時雨の定めなさを無常観に転化した点が当該歌の趣向といえる。『堀河百首』の女性詠に、やはり降雨に寄せて世のはかなさを歌った類似歌「いそのかみふる春雨のつくづく」と世のはかなさぞ思ひ知らるる」(春雨・一七六・河内)がある。

また『久安百首』の崇徳院詠に、夏歌ではあるが当該歌と下句を同じくする「かさね着し袖のひとへにかはるにもさだめなき世ぞ思ひ知らるる」(二二)がある。

六七 葦そよぐ潮風さむみかたきしの入江につどふあちの群鳥

【校異】○あしそよく―あしろより(松) ○かたきしの―底本「かたしきの」。歌意により校訂。「かたしきの」(群) ○いりえにつとふ―いりえにつたふ(松)、入江につたふ(群) ○あちのむらとり―底本「あはちむらとり」。「あちのむらとり」(松)、「あちの村鳥」(群)により校訂

【現代語訳】

葦の葉がそよそよとゆれ動く潮風が冷たいので、切り立った崖の入

江に寄り集まっているあじ鴨の群れだよ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・冬・一〇五六

蘆そよぐ塩風さむみかたぎしの入江につたふあぢのむら鳥

○『万代集』冬・一四四七

久安百首に

待賢門院堀川

あしそよぐしほかぜさむみかたそぎのいりえにつどふあぢのむらどり

【語釈】○葦そよぐ 葦の葉が風によってゆれ動き、そよそよと音を立てる。冬の海風になぶられる葦の葉は『堀河百首』の「寒蘆」題の歌にしばしば詠まれている。「津の国の須磨の浦風ふくたびにしをれし葦の音のみぞする」（九六四・源師頼）、「潮風にしをれにけりなながれ葦のおきふし春を待つとせしまに」（九七一・藤原基俊）。

○潮風さむみ 海上を吹いてくる風が冷たいので。この第二句は、冬の水鳥を詠じた著名歌「思ひかね妹がりゆけば冬の夜の河風さむみ千鳥鳴くなり」（拾遺集・冬・二二四・紀貫之）を念頭に置いている。

○かたきし 切り立って崖になったところ。同時代までの和歌では『拾遺集』『古今和歌六帖』に用例がある。 ○あぢの群鳥 「あぢ」

是水鳥の一種、アジガモ。八代集には見られず、「あぢの住む渚沙の入江の荒磯松我を待つ児らはただ一人のみ」（万葉集・卷十一・二七五）など、『万葉集』に用例が多い。「群鳥」は群らがっている鳥。

「あぢの群鳥」という歌句は院政期以降散見する。「今日よりはみは

らの池につららみてあぢの群鳥ひまもとむらん」（散木奇歌集・六五一）。

【補説】断崖を背負う入江に群れ集うアジガモを歌った一首。水鳥たちにとって断崖は、冷たい冬の潮風を避けるための壁でもある。なお海面に集うアジガモは、『堀河百首』にも「鳴海がた沖にむれゐるあぢむらのすだく羽風のさわくなるかな」（水鳥・一〇一五・藤原仲実）のように歌われている。

六八 ふる雪に園のなよ竹折れふしてけさは隣のへだてなきかな

【校異】異同ナシ（松・群）

【現代語訳】

降る雪の重みで庭のなよ竹が折れ伏し、今朝は隣家との境もなくなつたことだよ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・冬・一〇五七

ふる雪にそののなよ竹をれふして今朝はとなりのへだてなきかな

【語釈】○園のなよ竹 庭に植えられている、しなやかな竹。 ○折

れふして 地に接するほどになつて。同時代の百首歌に《園の竹》が雪のために「折れふす」さまを詠じた歌「かつ積もるうはばの雪や重からん折れふしにけり園のわか竹」（為忠家後度百首・竹園雪・四六八・藤原為盛）がある。西行の家集にも「雪埋竹」題の歌として「雪うづむ園のくれ竹折れふしてねぐらもとむるむら雀かな」（山家

集・五三五」という歌が見える。 ○へだて 行き来を妨げ、あるいは視線をさえぎるもの。仕切り。

【補説】庭のなよ竹が雪の重みで折れ伏して埋もれ、そのために隣家との境界がなくなってしまった豪雪の朝の風景を歌った一首である。植物を埋もれさせる雪と、その雪のために存在するはずのものが見えなくなることを歌うのは、「ふる雪に杉の青葉もうづもれてしるしも見えず三輪の山もと」（寛治八年（一〇九四）高陽院七番歌合・雪・五五・津の君／金葉集・冬・二八五・皇后宮撰津）、「難波江の葦の葉しのぎふる雪にこやのしのやも跡たえにけり」（承暦二年（一〇七八）内裏後番歌合・雪・二六／江帥集・一二二）など、院政期以降の「雪」の歌にしばしば見られるものである。当該歌もその系統に属するものと言えよう。

六九 昔^{むかし}など年^{とし}のおくりをいそぎけむつもれば老^をいとなりけるものを
【校異】 ○としのをくりを―年の終りを（群） ○なりける物を―成ぬる物を（群）

【現代語訳】
昔はなぜ、歳末の行事をせつせと行つたのだらうか。年が重なるとこのように、それだけ老齢となるものだったのに。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・冬・一〇六〇
むかしなど年のをはりをいそぎけん過ぐれば老と成りにけるかな

【語釈】 ○年のおくり 歳末の行事を行い、これまでの一年を締めくくること。 ○いそぎ せつせと物事を進めること。 ○つもれば老いとなりけるものを 「おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの」（古今集・雑上・八七九・在原業平）を念頭に置く。

【補説】すでに年老いた人物の立場で詠んだ、嘆老の歌。「かぞふればわが身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん」（拾遺集・冬・二六一・平兼盛）を踏まえつつ、かつて年の送りをせつせと営んだことへの後悔を詠じた。なお『堀河百首』「除夜」題の女性詠に、やはり兼盛詠を念頭に置いて歳末の嘆老を詠じた歌があり、参考になる。

過ぎぬれば我が身の老いとなるものを何ゆゑ明日の春を待つらん
（堀河百首・除夜・一一一八・肥後）
はかなしや我が身も残りすくなきに何とて年の暮をいそぐぞ
（堀河百首・除夜・一一一九・紀伊）

恋

七〇 勅^{みだ}かくとだにいはぬにしげき乱^{あじ}れ葦^{あし}のいかなるふしに知らせそ
めまし

【校異】 ○かくとだに―底本「かくたに」。「かくとだに」（松・群）により校訂

【現代語訳】 恋
このように恋しく思っていますとさえ言わないでいるのに、思いが

つゝて心が乱れているが―その「いはぬ」という沼に茂り合う乱れ葦の節ではないが―いったいどんな折にこの思いを告げたものであろうか。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋一・一〇六二

かくとだにはぬにしげき乱あしのいかなるふしにしらせそめまし

○『新勅撰集』恋一・六五八

久安百首歌たてまつりけるこひの歌

待賢門院堀河

かくとだにはぬにしげきみだれあしのいかなるふしにしらせそめまし

【語釈】○かくとだに このように恋しく思っていますとさえ。一首

は「かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」

(後拾遺集・恋一・六一二・藤原実方)を念頭に置く。○いはぬ

「乱れ葦」との関連から、「言はぬ」に「沼」を掛けていると見る。

参考「しのびつるねぞあらはるあやめ草いはぬに朽ちてやみぬべければ」(紫式部集・六三)。○乱れ葦 秩序なくばらばらに生えている葦。二・三句は「ふし」を導く序詞であると同時に、心に秘めた

恋の思いがつつて心が乱れていることの表象。○ふし 折節、機

会の意の「節」と葦の「節」の掛詞。○知らせそめまし あの人に

告げたものであろうか。「知らせそむ」は初めて相手に知らせるの意。

「まし」はある事柄へのためらいの感情を表す。

【補説】男性の立場から、自分の心ひとつに秘めた恋の苦しみを歌っ

た一首。どんな折に相手に思いを打ち明けようかと歌っているが、言外には、打ち明けない今でさえ心が乱れるのだから、とても打ち明けることなどできないという否定的な見通しを表現しているのであろう。

七一 勅 袖ぬるる山井やまゐの清水しみづいかでかは人目めもらさでかけみを見るべき

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】

すくいとると袖が濡れる山の井の清水ではないが、私はあの人を思う恋の涙で袖を濡らしている。どうしたら人の目に触れることなく、あの人姿を見ることができようか。とてもそんなことはできないだろう。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋一・一〇六四

袖ぬるる山井のし水いかでかは人めもらさでかけをみるべき

○『新勅撰集』恋一・六五九

(久安百首歌たてまつりけるこひの歌)

(待賢門院堀河)

そでぬるる山井のしみづいかでかはひとめもらさでかけを見るべき

【語釈】○袖ぬるる 袖が濡れる。「山井の清水」をすくいとること
で袖が濡れるのであるが、涙を暗示する表現でもある。なお『源氏物語』の歌にこの初句を持つ著名歌が二首見られる。「袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬ大和なでしこ」(紅葉賀・藤壺中宮)、

「袖ぬるるこひちとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき」

(葵・六条御息所)。○山井の清水 山の中にわき出ている清水。

一首は「安積山かげさへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものは」
(古今集・仮名序)を念頭に置く。○いかでかは いったいどうしたら。反語。↓【補説】。○人目もらさで 他の人の目に触れることとなく。「もらす」に水の縁語「漏らす」を掛ける。○かげ 恋しいあの人の姿。人の姿の意の「かげ」に、水の縁語「影」を掛ける。

【補説】前歌と同様、男性の立場から、恋の初めの時期の苦悩を歌った歌である。忍ぶる恋の主題に、思いを寄せる相手の姿を見たい願望を合せて詠んだところに工夫がある。同じ「いかでかは」という歌句を使用して恋の初期の思いを詠じた先行歌に、藤原実方の「いかでかは思ひありとは知らすべき室の八島の煙ならでは」(玄々集・二四／詞花集・恋上・一八八)がある。当該歌がこの歌も念頭に置いているとすれば、実方詠からの影響歌という点においても前歌と共通する。

七二 千 荒磯の岩にくだくる波なれやつれなき人にかくる心は

【校異】○かくる心は―底本「かはる心は」。「かくるこゝろは」

(松)、「かくる心は」(群)により校訂

【現代語訳】

荒磯の岩に砕けて散る波なのだろうか、あの薄情な人に思いをかけている私の心は。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇六五

あら磯のいはにくだくる浪なれやつれなき人にかくる心は

○『統詞花集』恋上・五一〇

新院人人に百首歌めしけるに

堀河

荒磯の岩に砕くる波なれや難面き人にかくるころは

○『月詣和歌集』恋上・三五〇

(題しらず)

待賢門院堀川

あら磯の岩にくだくる波なれやつれなき人にかくる心は

○『千載集』恋一・六五三

(百首歌たてまつりける時、恋のうたとてよみ侍りける)

待賢門院堀河

あらいそのいはにくだくる浪なれやつれなき人にかくる心は

○他、『時代不同歌合』百三十四番・右・二六八にも所載

【語釈】○荒磯 岩や石が多く、波が荒く寄せる海辺。『万葉集』では「荒磯」の形で詠まれ、「荒磯」の用例が現れるのは勅撰集では

『拾遺集』から。作者の父、源頭仲の『堀河百首』歌に、「荒磯」の波の寄せる松を詠じた次の例がある。「荒磯やいはねに立てるそなれ松浪にしをれぬ時のまぞなき」(堀河百首・松・一三〇二)。○岩

にくだくる波 岩にうち寄せて砕け散る波。「心くだくる」様子、す

なわち、さまざまに思い乱れる様子の比喻になっている。「風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけでもを思ふころかな」(重之集・百

首・恋・三〇三／詞花集・恋上・二一一)を踏まえる。○つれなき

人 冷淡な人。働きかけに対して期待したほどの反応を示さない人。

○かくる 思いをかける意に波の縁語「かくる」を掛ける。

【補説】「かくる心」という能動的な表現があるため、男性の立場からの歌であろう。いくら恋情を訴えても思うような反応が得られず、さまざまに思い乱れる心を、荒磯の岩に寄せて砕ける波にたとえた。広がりのある景の中、激しくうち寄せては砕け散る波という、イメージ鮮明な自然現象に恋心を形象化した具象性が見事な一首である。

七三 勅夢のごと見しは人にもかたらぬをいかにちがへて逢はぬなるらん

【校異】○みしは人にも―底本「みし人にも」。「みしは人にも」(群)により校訂。「みえし人にも」(松) ○かたらぬを―かはらぬを(松)、語らぬを(群)

【現代語訳】

夢のように逢瀬をかわしたとは、他の誰にも語っていないのに、どう間違つてあれ以来逢えなくなつたのだろうか。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇六九

夢のごとみしは人にもかたらぬにいかにちがへてあはぬなるらむ

○『新勅撰集』恋三・八三四

久安百首歌たてまつりけるこひのうた

待賢門院堀河

夢のごと見しはひとにもかたらぬにいかにちがへてあはぬなるらん

【語釈】○夢のごと見し 夢のように逢瀬をかわしたこと。恋人と契

りをかわすことを夢にたとえることは「夢のごとなどか夜しも君を見む暮るる待つ間もさだめなき世を」(拾遺集・恋二・七三四・壬生忠見)などに先例がある。○人にもかたらぬを 他の人にも話していないのに。○いかにちがへて どのように食い違つて。

【補説】悪夢を見たときに、正夢にならないようまじないをする習慣があつた。これを「夢違へ」という。また良い夢を見た場合にも、夢を人に語るとその夢の意味する事柄が実現しないという俗信があつた。

『宇治拾遺物語』には、吉夢を心ない相手に話したために罪を受けることになつた伴善男の話(巻一・第四)、吉夢を人に話したために他人に取られた人の話(巻十三・第五)が伝わっている。一首は、夢にまつわるこうした俗信と、逢瀬を夢にたとえる発想とを組み合わせる詠じたもの。男性の立場からの「会不会恋」、すなわち逢瀬をかわした後に逢えなくなつた恋の歌である。

七四 頼めずは憂き身のとがとなげきつゝ人の心をうらみざらまし

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】

もしあの人があてにさせないならば、情けない我が身のせいと嘆きながら、あの人の心を恨みはしないでしょうに。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇七四

たのめずはうき身のとがとなげきつゝ人の心を恨みざらまし

○『新後撰集』恋三・九九八

久安百首歌に

待賢門院堀川

たのめずはうき身のとがとなげきつつ人の心をうらみざらまし

【語釈】○頼めずは あてにさせなかったならば。主語は相手（第四句の「人」）。下二段活用。「頼む」は、約束や誓いなどによって、頼みに思わせる、期待させるの意を表す。○憂き身のとが 情けない自分自身の欠点や罪。「いかばかり人のつらさを恨みまし憂き身のとがと思ひなさずは」（詞花集・恋上・一九八・賀茂成助）。○なげきつつ 繰り返し嘆きながら。「つつ」は反復。○人の心をうらみざらまし あの人の心を恨みはしなかったでしょうに。参考「あふ事の絶えてしなくはなかなか人に身をもうらみざらまし」（拾遺集・恋一・六七八・藤原朝忠）。

【補説】女性の立場からの歌であろう。その女性が置かれている状況を具体的に示す表現はないが、「なげきつつ」とあるように繰り返し嘆いていることから、愛情が末永く続くことを約束する恋人の言葉をまだ信じていて、夜離れが続くなどして裏切られるたびに、相手の心を恨んでしまうような段階の歌と推測される。『堀河百首』における作者の父源顕仲の作に、やはり反実仮想の構文をとり、同じ結句を持つ歌「なかなか頼むばかりのことはを契らざりせばうらみざらまし」（恨・一二七〇）があり、影響が想定される。また『久安百首』における藤原俊成（顕広）の作にも類似歌「頼めずはなかなか世にもながらへて久しく物は思はざらまし」（恋・八六七）がある。しかし

これらに比し当該歌は、「憂き身のとが」という印象鮮明なことをばを用いつつ、詠歌主体の仮想の心情をより具体的に描出していると言える。

七五 ささがにのいかさまにかは恨むべきかき絶えぬるも人のとがかは

【校異】○いかさまにかは―底本「いとゝりいかさまにかは」。「いかさまにかは」（松・群）により校訂

【現代語訳】

どのように恨むことができようか。二人の仲がまったく絶えてしまったのも、あの人のせいだろうか。いえ、まぎれもなく私のせいなのなもの。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇七六

ささがにのいかさまにかは恨むべきかきたえぬるも人のとがかは

○『続詞花集』恋下・六二四

新院人々に百首歌めしけるに

堀川

ささがにのいかさまにかは恨むべきかきたえぬるも人のとがかは

○『中古六歌仙』堀河局・二五二

（恋）

ささがにのいかさまにかはうらむべきかきたえぬるも人のとがかは

【語釈】○ささがにの 枕詞。「ささがに」が蜘蛛の異名であること

から、「くも」「い」「いと」などにかかる。「網」とは蜘蛛の巣のこと。参考「しのすき上葉にすがくささがにのいかさまにせば人なびきなん」(金葉集・恋上・三五一・大江公頼)。○かき絶えぬるも 関係がふつりと途切れてしまったことも。「かき絶ゆ」は音信などが全く途絶える意。「かき」に「ささがに」の縁語「掛き」を掛ける。参考「かき絶えてほども経ぬるをささがにのいまは心にかからずもがな」(金葉集・恋上・四〇四・皇后宮美濃)。○人のとがかは あの人^{あの人}のせいだろうか、いえ、そうではなく私のせいだ。「恋ひ死なむ身こそ思へば惜しからね憂きもつらきも人のとがかは」(詞花集・恋上・二二一・平実重)。ほか、同時代の『散木奇歌集』(一三五七)、『林葉和歌集』(七四三)などにも同じ結句を持つ歌が見られる。

【補説】同時代までの恋歌の表現を摂取しつつ、「ささがに」の縁語を用いて構成した一首。七四番歌と同様に女性の立場からの歌であるが、「かき絶えぬる」とあることから、もう少し状況の悪化した段階の歌とわかる。「とが」「恨む」ということばを用いている点でも七四番歌と共通するが、結局は相手の心を恨む思いを表現している七四番歌に対し、当該歌では、自分に非があるゆえ相手を恨むことはできないと歌っている。

七六 勅うたがひし心のうらのまさしきは訪はぬにつけてまづぞ知るる。
勅うたがひし心のうらのまさしきは訪はぬにつけてまづぞ知るる。

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】

あの人^{あの人}の誠意を疑った私の予感が間違っていなかったことは、訪れがないことにつけて、まづもってわかることです。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇七〇

うたがひし心のうらのまさしきはとはぬにつけてまづぞしらるる

○『新勅撰集』恋五・九九八

(百首歌たてまつりける時)

待賢門院堀河

うたがひし心のうらのまさしきはとはぬにつけてまづぞしらるる

【語釈】○心のうら 心の占。心の中で未来について占い、判断すること。○まさしき 見込み通りであること。予測などがそのまま実現すること。○訪はぬ 恋人の訪れが途絶えること。「占う、占いの結果を求める」意の「占を問ふ」という表現を踏まえて、「心のうら」の縁語となっている。○まづぞ知らるる 真つ先にそれとわかる。

【補説】女性の立場からの歌。『久安百首』では、七四番、七五番歌よりも数首前に配列されている。一首は「かく恋ひむものとは我も思ひにき心のうらぞまさしかりける」(古今集・恋四・七〇〇・読人不知)を踏まえる。この古今歌は、自分の恋心が深くなることを予測した「心のうら」が間違っていなかったことを歌ったもの。いっぽう当該歌は、恋人がいずれ自分に飽きるだろうと占った判断がその通りで

あったことを歌う。恋人の訪れが途絶えたことによって、相手が自分に飽きたことをまず悟る心境を詠じている。

七七 千憂^うき人をしのぶべしとは思^{おも}ひきやわが心^{こころ}さへなどかはるらん

【校異】 異同ナシ（松・群）

【現代語訳】

憎らしいあの人を恋しく思うことになろうとは、思いもしなかったことです。あの人の心ばかりでなく私の心まで、どうしてこうも変わってしまったのでしょうか。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇七一

うき人をしのぶべしとはおもひきやわが心さへなどかはるらむ

○『後葉集』恋四・三九七

百首歌中に

待賢門院堀川

うき人をしのぶべしとはおもひきやわが心さへなどかはるらん

○『月詣和歌集』恋下・五九七

待賢門院堀川

うき人をしのぶべしとも思ひきや我がこころさへなどかはるらん

○『千載集』恋五・九一八

百首歌たてまつりける時、恋のうたとてよめる

待賢門院堀河

うき人をしのぶべしとはおもひきやわが心さへなどかはるらん

○『中古六歌仙』堀河局・二五三

（恋）

うき人をしのぶべしとはおもひきやわが心さへなどかはるらむ

○『時代不同歌合』百三十五番・右・二七〇

うき人をしのぶべしとは思ひきやわが心さへなどかはるらん

【語釈】○憂^うき人 恋愛関係において、自分につらい思いをさせる人。

憎らしい人。「君をのみ起き臥し待ちの月見れば憂き人しもぞ恋しかりける」（古今和歌六帖・有明・三六三）が早い例。○しのぶ 思

慕する。恋しく思う。「しのぶ」は過去のことや離れている人を恋しく

思う気持ちを表現することが多い。○思^{おも}ひきや 思っただろうか、

いや思いもしなかったことです。「や」は反語。○わが心^{こころ}さへなど

かはるらん あの人的心だけでなく私の心まで、なぜ変わってしまった

のでしょうか。

【補説】これも女性の立場からの歌であろう。心変わりをした恋人を

心底恨めしく思ったはずなのに、恨めしさとはうらはらに、気づけば

恋しく思うようになっていく。そうした気持ちの変化は自分でも思い

も寄らなかつたと詠じた一首である。「しのぶ」という言葉が用いら

れていることから、恋人とはすっかり別離した段階の歌であることが

読みとれる。なお「憂き人」への矛盾する心を詠んだ同時代の類似歌

に「憂き人を思ひ絶えなむともへどもかなはぬものは心なりけり」

（江帥集・二四〇）がある。

七八 続後 忘れにし人はなごりも見えねどもおもかげのみぞたちも離れぬ

れぬ

【校異】○集付―続後撰(群) ○たちもはなれぬ―立もはなれぬ

(群)

【現代語訳】

私を忘れてしまった人は、かつて訪れていた気配もすっかりなくなつたけれど、面影ばかりは私のもとを離れ去ることもないよ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇七八

忘れにし人はなごりも見えねども面かげのみぞたちもはなれぬ

○『続後撰集』恋五・九五八

久安百首歌の中に

待賢門院堀河

わすれにし人はなごりも見えねどもおもかげのみぞたちもはなれぬ

【語釈】○忘れにし人 私を忘れてしまった人。かつては恋愛関係にあつたが、関係が途絶えてしまった人。「忘れにし人のさらにも恋し

きかむげに來じとは思ふものから」(拾遺集・物名・三六五・読人不

知)。○なごり 物事が過ぎ去った後になお残る気配。参考「有明

の月見すさびにおきてゆく人のなごりをながめしものを」(金葉集三

奏本・秋・二〇九・和泉式部)。○おもかげのみぞたちも離れぬ

あの人自身は離れたが、あの人の面影だけは私のもとを離れ去ることもないよ。「おもかげ」は現実の姿ではなく想像の中で目に浮かぶ姿。

【補説】女性の立場から、恋人が以前訪れた名残はすっかりなくなつ

たのに、面影だけは自分のもとを離れず、目の前に浮かんでいると詠じた一首。第三句以降は「君恋ふる涙に月は見えねどもおもかげのみぞたちも離れぬ」(続拾遺集・雑下・一三〇〇・源師時)とまったく同じである。これは『久安百首』を四十年ほど遡る嘉承二年(一一〇七)、堀河帝が崩御した秋の明月の夜に、師時が亡き帝を偲んで詠じた歌である。当該歌はこの師時詠を踏まえ、恋歌に仕立てたものであろう。

七九 あふごなき嘆きのつもるくるしさを負へかし人のこりはつるま

で

【校異】○集付―千載(群) ○あふごなき―あふごなき(群)

【現代語訳】

逢つて契りをかわす折のない嘆きが積もる苦しさを、あの人も背負うがいいよ。懲り懲りするまで。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・恋・一〇八〇

あふごなきなげきのつもるくるしさをとへかし人のこりはつるまで

○『続詞花集』恋上・五一五

新院人々に百首歌めしけるに

堀河

逢ふ事のなげきのつもるくるしさをおへかし人のこりはつるまで

○『千載集』雑下・誹諧歌・一一九三

百首歌たてまつりける時、恋のうたとてよめる

待賢門院堀河

あふことのなげきのつもるくるしさをおへかし人のこりはつるまで

【語釈】○あふ^{あふ} 男女が契りをおわす折の意の「逢ふ期」に、天秤棒の意の「枋」を掛ける。「人恋ふことを重荷とになひもてあふこなきこそわびしかりけれ」（古今集・雑体・誹諧歌・一〇五八・読人不知）。○嘆きのつもる 悲嘆が積み重なる。「嘆き」に「木」を掛ける。「つもる」は木の縁語。○負へかし 背負うがいいよ。「負へ」に木の縁語「負へ」を掛ける。「かし」は念を押す気持ちを表す終助詞。○こり 「懲り」に木の縁語「伐り」を掛ける。

【補説】「枋」「積もる」「負へ」「伐り」と、木の縁語を連ねて掛詞縁語仕立てで詠じた一首。いくら愛を訴えても逢瀬の機会がないことを嘆く男性の立場からの歌とも、相手の訪れがすっかり途絶えて嘆きを重ねた女性の立場からの歌とも解せる。『久安百首』ならびに本集における配列からは、後者と解するのがよいであろう。『続詞花集』では、恋上に部類されているので、男性の立場からの歌として配列しているものと見られる。「負へかし人のこりはつるまで」という下の句は、詠者自身がすでに懲り懲りしている心境にあることを暗示している。

八〇 深くのみ契りしことを思ひいでば音はしてまし山川の水

【校異】○思ひては―思ひいては（群）

【現代語訳】

ひたすら深く契ったことをあの人が思い出してくれるならば、浅い山川の水の音ではないが、今は愛情の浅くなったあの人も便りはよこしてくれるでしょうに。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀河・恋・一〇七九

ふかくのみ契りし事を思ひ出に音はしてまし山川の水

【語釈】○深くのみ契りしこと 心変わりはないなどと、かつてひたすら深く約束したこと。「深く」は水の縁語。○思ひいでば 思

い出してくれるならば。主語は相手の男性。○音はしてまし 音信

はよこしてくれるように。「秋風の吹くにつけても問はぬかな萩の葉ならば音はしてまし」（後撰集・恋四・八四六・中務）。「音」

は水の縁語。○山川の水 「そこひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀬

にこそあだ波は立て」（古今集・恋四・七二一・素性）のように、

「山川」は浅いものとされたため、浅い心を連想させる。「はやくよ

り浅き心と見てしかば思ひたえにき山川の水」（金葉集・恋下・四七

七・読人不知）。

【補説】かつて自分に愛の永続を繰り返し誓った恋人の訪れがすっかり絶え、便りさえもなくなった状況に身をおく、女性の立場からの歌である。『久安百首』では第三句が「思ひ出に」とあるが、家集の本文の方が反実仮想の構文（「……ば、……まし」）に則っており、解しやすい。

神

八一 いろいろにうき身をいのる幣ぬさなれば手向たむくる神もいかが見るぐみべき

【校異】○いかゝみるへき―いかゝみるらんイへき(群)

【現代語訳】神

さまざまな色をしていて、さまざまにつらい身の上の願い事を祈る幣なので、お供えする神もどのように御覧になるだろうか。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・神祇・一〇八三

色色にうき身を祈るぬさなればたむくる神もいかがみるらん

【語釈】○神 『久安百首』題では「神祇」。 ○いろいろに

まざまに(祈る)の意に「さまざまな色に」の意を掛ける。 ○幣

神に祈るときに捧げるもの。さまざまな色の布や紙などで作られた。

「ものへまかる人に幣つかはすとて／いろいろに深き心を染めてこそ

君が手向けの幣となしけれ」(能宣集・二二二)。 ○手向くる神

供え物をする対象である神。「竜田姫手向くる神のあればこそ秋の木

の葉の幣と散るらめ」(古今集・秋下・二九八・兼覽王)。 ○いか

が見るべき 「べし」は推量の意を表す。

【補説】『久安百首』の「神祇」題の歌として二首詠まれたうちの

一首。さまざまな色の幣に寄せた願い事が多々あるので、神が当惑する

のではないかと、神の心を付度した歌である。『久安百首』の本文の

第五句「いかがみるらん」であれば、神はどのように見ているだろう

かの意となる。幣を捧げる神の思いを推量する歌は「染めたちて折れる幣の思ひをば手向けの道の神や知るらん」(古今和歌六帖・幣・二三九五)など、『古今和歌六帖』の「幣」「手向け」の項目に数首見られる。

仏

八二 長ながき夜よに迷まよふさはりのくもはれて月の御顔みかほを見るよしもがな

【校異】○集付―続千(群) ○くもはれて―底本「山もはれて」。

「雲はれて」(群)および歌意により校訂。「雲なれば」(松)

【現代語訳】仏

長い無明の夜の闇にさまよう障りの雲がすっかり晴れて、真如の月の御顔を見る手だてがあつたらいいなあ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・尺教・一〇八八

ながきよにまよふさはりの雲晴れて月のみかほをみるよしもがな

○『後葉集』雑五・五八八

百首歌中に

待賢門院堀川

ながき世にまどふさはりの雲はれて月のみかほを見るよしもがな

○『続千載集』釈教・九九五

百首歌奉りける時

待賢門院堀河

ながきよにまよふさはりの雲はれて月のみかほをみるよしもがな

【語釈】○仏 『久安百首』題では「尺教(釈教)」。

○長き夜

煩惱にとらわれ悟りを得ない状態を長い闇夜にたとえていう。無明長

夜。「わづらふ頃、参河入道を呼びて戒受けたるに、程なくて死にければ／長き夜の闇に迷へるわれをおきて雲がくれぬる空の月かな」

(玄々集・小大君・四三)。↓二七番歌。○さはりのくも 悟りを

開く妨げとなる障害を、月を隠す雲にたとえていう。ここでの「さはり」は、女性が持つとされた五つの障害(梵天王、帝釈、魔王、転輪聖王、仏の身になれないこと)を言うか。参考「龍女は佛に成りにけり、などか我等も成らざらん、五障の雲こそ厚くとも、如来月輪隠されじ」(梁塵秘抄・二〇八)。○月の御顔 真如の月の照り輝く姿をいう。真如の月とは、仏法の真理、または迷いから解放された悟りの心を明月にたとえた語。

【補説】『久安百首』の「尺教」題の歌として五首詠まれたうちの一首。悟りを妨げるものがすっかりなくなり、仏法の真理を体得する手だてがほしいと歌った歌である。一首のことば続きは「秋の夜の月にかさなる雲はれて光さやかに見るよしもがな」(後撰集・秋中・三二〇・読人不知)を念頭に置いていよう。

無常

八三 夢の世をおどろきながら見る程はただまぼろしの心地こそすれ

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】無常

夢のようにほかないこの世を、目を覚ましながらか眺めていると、こ

の世がただ幻のような思いがすることだ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・無常・一〇九一

夢の世をおどろきながらみるほどはただまぼろしの心地こそすれ

【語釈】○無常 『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』の項目として、また『堀河百首』題として見える。○夢の世 夢のようにほかない現世。

○おどろきながら 「おどろく」は、はつと目が覚めるの意。初二句は、この世のはかなさを認識している状態をいう。↓【補説】。

○まぼろし 現実にはないものの姿が、あるように見えるもの。幻影。ほかないものをこれにたとえることも多い。「白露も夢もこの世もまぼろしもたとへていへば久しかりけり」(後拾遺集・恋四・八三一・和泉式部)。はかなさや曖昧さの程度においては、現実と夢との間である。「うつつにもまぼろしの世と思ふ身にまた夢をさへ何と見るらん」(堀河百首・夢・一五四九・隆源)。

【補説】『久安百首』の「無常」題の歌として二首詠まれたうちの一首。夢のようにほかないこの世を、目を覚ましつづきつというものと認識しながら眺めると、まるで目覚めながら見ている夢、すなわち幻のような思いがすると歌った。「夢の世」から目覚めないことの愚かさを詠じた先行例に次のような歌があり、影響が想定される。

はかなしとまさしく見つる夢の世をおどろかぬる我は人かは

(和泉式部続集・帥宮挽歌群・六一)

夢よりもはかなく見ゆる世の中をなだおどろきてそむかざるらん

わかれ

八四 ゆく人も惜しむ涙もとどめかね忘るなどだにえこそ言はれね

【校異】異同ナシ(松・群)

【現代語訳】別れ

去りゆく人も、別れを惜しむ私の涙もとどめることができないで、
悲しみのあまり、忘れないでとさえも言えないことだよ。

【他出】

○『久安百首』待賢門院堀川・離別・一〇九三

ゆく人もをしむ涙もとどめかね忘るなどだにえこそいはれね

○『後葉集』別・二六一

百首歌たてまつりけるなかに、別の心を 待賢門院堀川

ゆく人もをしむ涙にとどめかね忘るなどだにえこそいはれね

【語釈】○ゆく人 旅に出るなどして去って行く人。 ○惜しむ涙

見送る人が流す、別れを惜しむ涙。「帰りこんこともおぼれて思ほえず今日の別れを惜しむ涙に」(堀河百首・別・一四八五・隆源)。

○忘るな 忘れるな。別れを惜しむ人々が相互に述べ合うことば。参考「忘るなよほどは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで」

(伊勢物語・十一段／拾遺集・雑上・四七〇・橘忠幹)。

【補説】旅立つ人を見送る人物の立場からの歌。去りゆく人をとどめられないばかりか、自分の涙も止めることができず、「私のことを忘

れないください」という惜別のことばさえも言うことができないほどの悲嘆の思いを詠じた。下句は、天台座主源心の歌「ながらへてあるべき身とし思はねば忘るなどだにえこそ契らね」(続詞花集・別・六七八／千載集・離別・四八八)の下句に近似している。これは越前国で法会の導師を務めた源心が上京する際、法会の主催者が別れを惜しんだ折に詠じた歌である。源心は天禄二年(九七一)生、天喜元年(一〇五三)没であるため、この歌は当該歌より先の成立である。

(かとうむつみ 本学教授)

(まつもとまなみ 尚綱学院大学教授)